

ロールシャッハ・テストによるうつ病の研究 所謂 内因性うつ病を中心として

著者	吉田 邦夫
号	205
発行年	1963
URL	http://hdl.handle.net/10097/17832

氏 名 よし だ く ち
吉 田 邦 夫

授 与 学 位 医 学 博 士

学 位 授 与 年 月 日 昭 和 3 8 年 3 月 2 6 日

学 位 授 与 の 根 拠 法 規 学 位 規 則 第 5 条 第 1 項

研 究 科 , 専 攻 の 名 称 東 北 大 学 大 学 院 医 学 研 究 科

内 科 学 系

学 位 論 文 題 目 ロールシャッハ・テストによるうつ病の研究
所謂内因性うつ病を中心として

指 導 教 官 東 北 大 学 教 授 石 橋 俊 実

論 文 審 査 委 員 東 北 大 学 教 授 石 橋 俊 実

東 北 大 学 教 授 鳥 飼 龍 生

東 北 大 学 教 授 本 川 弘 一

論文内容要旨

うつ病に対するロールシャッハテストの試みは、テストの創案者たる Rorschach をはじめ Guirdham, Beck, Varvel, Klopfer, Rapaport 等によつてなされており、本邦では中江、広沢の研究がある。著者は所謂内因性うつ病にロールシャッハテストを施行し、従来のうつ病を対象とした諸研究と比較考察をおこない、病前性格、病像との関連についても検討をおこなつた。従来のうつ病のテスト上の特性を要約すれば、反応数の減少、反応時間の遅延、運動反応及び色彩反応の減少、全体反応の減少、F+ % の高率化、A % の上昇、体験型の共質化カードの拒否などである。

検査対象及び方法

被験例は東北大学神経精神科外来及び入院患者を主とした40例で、男18名、女22名である。年齢は18才より63才にわたっている。患者の病状変化を追求する目的で、40例中25例に病相期（治療前）と治療後の時期の2回の検査を行つている。治療後のデータも、病相が完全に寛解した時に検査することを可及的な立前としたが、病状の軽快をみると自ら治療を中断する患者が多いので、全症状が消褪し、社会復帰が可能なまで軽快した時期にテストを行つたものもある。対象例の知能は全て正常変異域にあり、2回目のテストは治療の影響が除外できる状態で行つている。使用図版は東京ロールシャッハ研究会監修の標準ロールシャッハ図版を用い、得た資料は片口法により分類整理した。

結果及び考察

全症例の病相期における検査結果は1) 反応数は一般に少ない。2) 反応時間の遅延。3) 拒否が生じ易い。4) W % の一般的低下。5) Dm % の上昇。6) 運動反応の減少。7) R+ % は必ずしも高くない。全く低いものもある。8) F % は一般に高い。9) 色彩反応が増大する例もある。10) 必ずしもA % の上昇をみない等である。反応内容に<絵><写真><影絵>などという表現が多いのも特徴的である。治療後の所見は相対的に、1) 反応数の増加（減少するものもある。）2) 反応時間の短縮。3) 拒否の減少。4) W % は更に低下。5) Dm % の減少。6) 運動反応は増加するとは限らない。7) R+ % : 低いものは上昇する。8) ΣC は適切な値にな

る。(増減) 9) A%はあまり変らない等であり、改善がみられる。ところで従来諸研究は tabular な方法による解釈にとかく重点を置き、一般的諸傾向の評価を許すにしても、個々の症例の特徴を消去してしまい病者の心的力動性に対する洞察に乏しいものと考えられる。

Kretschmer は Zyklold 気質と躁うつ病との親近性を説いたが、下田は Zyklold 気質と躁うつ病との直接的関係に疑義を懐き、うつ療の特有な病前気質は執着性気質であるとし、躁うつ病との関係は感情の持続的緊張の傾向ということで説明する。我々の症例の全例においても多かれ少なかれ執着性気質を見出すことが出来るが、治療後のデータはうつ病者の thymop-athische Konstitution を反映していることが知られる。病前性格(気質)から症例を大別すると、対蹠的に顕著な特徴を示すものとして、次の2つの類型に分けられる。類型Ⅰ：執着の傾向と Zyklold 気質が同時に見られる型、類型Ⅱ：執着性と無力、抑うつ的で分裂気質的な性格の共存する型である。類型Ⅰの Zyklold 気質に ΣC は親和性があり、特に病前陽気の極にある者と、必らずしも陽気の極になくとも、気分の安定性を欠き感情反応にむらのある人に ΣC との親和性が著しいようである。かゝる類型では病相期の方が、寛解時よりも ΣC は大であり、 ΣC に伴い ΣO も増加の傾向がある。又色彩に敏感である。抑うつ状態においても、多くの場合反応数が正常域にあり、外拡的体験型を示す。類型Ⅱに属する者に、人格の萎縮、絞切型化を示す結果をみるのが多い。勿論ロールシャツハ反応は、抑うつ病像の程度に相応の影響を2類型共にあらわしている。一般的には、不安が強い症例には DW と DO の出現、R+ %の低下をみるようである。うつ病という心的機能の解体によつて示される精神病理学的事実は、我々がその中にあつて感情生活を展開する共同世界の崩壊により、Vital な感情の世界の出現をみることをおしえる。基本的な Socius の関係が崩れ、うつ病固有の自己世界関聯性が開示される。我々はロールシャツハ法により病的活動の特異的構造を追求し、うつ病に固有な世界形象(Minkowska)を見出すことが目的であるが、こゝでは何かというよりも如何にということが問題となるのであり<形の世界>の構造は一つの全体的構造をもつて現象するのである。うつ病者の反応で、1) <・・・と似ているがよく分らない><・・・のよう感じた>等の言いまわし—自信がないための卑下的な表現だけでなく、変つた見慣れぬことを表示している。2) <・・・みたい絵><影絵><・・・を写真にとつたもの>等の反応内容—プロット全体を関聯づける傾向(多くは全体反応) 3) 反応内容の Stereotypy 4) 反応拒否(失敗)等は病者の世界における感情的意味の投影と考えられる。平板化、貧困化した世界形象を表示する表現から病者の知覚はより安定化し、単調化するものとも抽象されるが、寧ろ<生成に内在する Zeitgeschehen>(v. Gebattel)の障害の erlebtes Symbolik (Kloos)として解すべきと考える。病者の損われた時間性は未来への飛躍を喪失し、過去に押しひしがれ、歪曲された<形の世界>として我々に把握されるのであるが、結局了解不能で<分裂病よりも自閉的な>(Kranz) 原初的不安の幻影の世界につき当るのである。

審査結果の要旨

著者は内因性うつ病40例を対象として、ロールシャハ・テストを施行し、従来の諸研究と比較考察を行うと共に、病前の性格傾向や病像との関連を追求した。

病相期におけるロールシャハ反応の結果をみると、反応数の減少、反応時間の遅延、全体反応の減少、運動反応の減少、Ddの増加、反応拒否（失敗）などが多い。形態水準は必ずしも高くはなく、かえって全く低いものもある。体験型は共食型または外拡型を示す。（……らしい）、（……と似ているがよくわからない）などの言いまわし、（絵）、（墨絵）、（写真）などの反応内容等で示される。ロールシャハ反応の特徴から、著者は、うつ病を対蹠的な二つの類型に分けることが出来るとしている。すなわち

類型Ⅰ：人格の萎縮、紋切型化をあらわし、従来うつ病のロールシャハ反応において典型的なものと考えられているもの。

類型Ⅱ：反応数、色彩反応が多く、比較的内容の変化に富むもの（外拡的体験型）

以上の結果を通じ、ロールシャハ反応には個体そのものの演ずる役割が如実に現われていること、病者に固有な世界に対する構えが反映されていることを論じている。

よつて本論文は学位を授与するに値するものと認める。